

■ 活動記録 ■

◆ 研究活動 ◆

2010 年度先端社会研究所共同研究プロジェクト

指定研究プロジェクトの進捗状況報告

関西学院大学先端社会研究所は、「〈他者〉問題の解明」を設立の基本理念としている。つまり、ある集団、社会が共約不可能な「他者」として認知され、領域化された「われわれ」の外部に排除されるか、あるいは、その内部に支配、管理する対象として包摂される力学、メカニズムを伝統的な学術領域を横断する共同研究によって解き明かすことを目指している。2010～2011年度は、3つの相補的プロジェクト―「共生／移動」、「景観／空間」、「セキュリティ／排除」―を定め、それぞれ個別の共同研究を実施して、「他者」問題の解明に資する新しい視座の提供に取り組んでいる。以下、指定研究プロジェクトの進捗状況報告である。

◆ 「共生／移動」プロジェクト

リーダー：島村恭則研究員（関西学院大学社会学部教授）

「共生／移動」プロジェクトは、「複数の多文化共生論」という観点に立ち、地域社会の多様な生のあり方に即した「内発的多文化共生論」を構想・構築することを目的としている。この研究は、外発的な理論、政策のストレートな移入に傾きがちな多文化主義の現状を相対化し、従来の多文化主義をめぐる議論に新たな知見を提示することをめざそうとするものであり、この目的・趣旨のもと、全体を二つの個別プロジェクト（指定研究『『マチ場的なるもの』からの多文化共生論―近代都市の経験と生の多様性―」、公募研究「アメリカ合衆国都市におけるラティノー系およびカリブ海系住民の社会運動と文化実践についての研究」）に分けて具体的研究活動を展開している。

指定研究では、2010年5月の研究活動開始以来、3回の共同研究会と研究員各自によるプロジェクト遂行計画に沿った個別調査研究活動を展開した。

具体的には、2010年6月25日に第1回研究会として岡田浩樹氏（神戸大学大学院国際文化学研究所教授）を講師に招き、「『多文化共生』言説の意味作用に関する批判的検討―神戸市長田区の事例を通して―」と題する報告にもとづく議論を行なった。その内容は、本プロジェクトがめざす、従来の多文化共生言説の批判的検討と「複数の多文化共生論」の可能性の追求という目的にまさに合致する内容であり、プロジェクト着手段階の理論的枠組みの整備にとってきわめて有益な機会となった。

つづいて7月16日には、Matthew Marr氏（フロリダ国際大学グローバル・社会文化学部助教授）を講師として招き、「ホームレス、グローバル／ローカルの文脈―東京と米国 Los Angeles の比較を通して―」と題する報告にもとづく議論を展開した。グローバル化とネオリベリズムの影響、ローカルな文脈の相互作用が、世界の趨勢となりつつあるホームレスの増加と定着化にいかなる影響を及ぼしているのかを問題とした本報告と議論によって、マチ場研究の重要な論点である「都市下層」に関する新たな理論的見通しへの糸口をつかむことができた。

さらに、9月18日には、高原基彰氏（東京工科大学メディア学部非常勤講師）による『『現代日

本の転機』をめぐって」の報告と討論を行なった。議論は、戦後日本の左右対立の成立と崩壊を概観した上で、政権交代後の現在も続く内政・外交における混乱を乗り越えるための視座がどこにあるのか主題としたものであるが、これは本プロジェクトの課題である多文化共生論の再構想を、大きな社会・政治的文脈の中で検討する上で非常に有益であった。

これらの共同研究会に加え、プロジェクト構成員は、それぞれ個別の調査・分析作業として、新潟市、大阪市港区、久留米市、瀬戸内海沿岸諸都市、静岡県伊東市、群馬県太田大泉地区、中国雲南省等国内外各地での現地調査（島村・荻野・今井・山）、「マチ場的なるもの」と排外主義の関係に関する計量的調査の枠組み整備（金）、を実施している。

一方、公募研究では、都市研究のロス・アンジェルズ学派に位置づけられる論者であるマイク・デイヴィスの *Magical Urbanism: Latinos Reinvent the US Big City* の検討作業を進め（鈴木）、また、合衆国フロリダ州マイアミにおけるカリブ海系住民の社会運動や文化実践についての現地調査に先立つ先行研究の分析、理論的検討を行なっている（辻）。

以上が2011年1月時点での研究進捗状況であるが、引き続き2月に共同研究会を1回実施し（横浜市において戦後に展開した米軍と地域社会との文化的交渉に関する報告を予定）、また3月には中国雲南省社会科学院との連携による現地研究会および現地調査を実施することになっている。その成果については、続稿で報告したい。

なお、本紀要には、プロジェクト代表者である島村がこの8ヶ月の間に行なった現地調査の中から、別府と伊東に関する調査成果の一部を「研究ノート」として提示しておいた。

◆「景観／空間」プロジェクト

リーダー：山口覚研究員（関西学院大学文学部教授）

景観／空間プロジェクトでは、春学期に引き続き、毎週月曜日の12時50分に文学部地理学地域文化学研究室に参集して研究報告会をおこなってきた。2010年度下半期には以下の報告がなされた。

2010年

- 9月27日 山口覚「都市景観および都市景観行政について考える」
- 10月4日 中野康人「Kirtipurの景観問題」
- 10月18日 金子直樹「旅行ガイドブックから見た神戸・西宮」
- 10月25日 長尾隼「戦前期の国立公園選定過程における海岸風景地の位相」
- 11月15日 雪村まゆみ「ブリュッセルにおける景観調査報告」
- 12月6日 岡本卓也「思い出の風景としてのキャンパス」
- 12月13日 山口覚「〈都心内郊外〉としてのタワーマンション—都市空間構造の変容と他者問題」
- 12月20日 金子直樹「観光地としての安曇野」

2011年

- 1月17日 荒山正彦「『旅程と費用概算』による植民地ツーリズムの軌跡」

また、10月15日には、2010年度定期研究会第6回（共同研究「景観／空間」研究会第2回）において、地域環境計画研究所の若狭健作氏による「工都尼崎の記憶を伝えるまちづくり」との講演がおこなわれた。脱工業化時代において衰退傾向にある尼崎市の中でも、特に南部工業地域ではその傾向が著しい。同氏は南部地域において新たなイベントを実施し、南部における工業景観の新たな見せ方などを実践してきた。今回の研究会では、そうした諸実践について具体的な説明を頂き、都市景観や都市イメージをめぐる新たな取り組みについて議論した。さらに、若狭氏がその諸実践の一環としておこなっている「尼崎運河クルージング」について、本プロジェクトにおける「エクスカッション」の主要行程とすべく同氏にそのセッティングを依頼し、11月27日に実施された。また、同日における付随事業として、山口が一連の研究会で触れてきた内容を現地で紹介した。その詳細については別稿を参照されたい。なお、本プロジェクト詳細に関しては、プロジェクト URL <http://iasr-kgu.org/landscape/> を参照されたい。

2010年度における研究員各自の成果は以下の通りである（50音順）。

岡本卓也—2010年度の研究活動としては、(1) 写真投影法による高齢者の環境認知に関する調査、(2) 写真投影法による沖縄の表象に関する調査、(3) 安曇野市景観調査データの分析、を行った。(1)については、京都市中京区の60歳以上の高齢者を対象にデジタルカメラを手渡し、普段の生活の中で気がついた物をなんでも撮影してもらい、それをもとに面接調査を行った。高齢化が進む当該地域の住民にとって住みよいコミュニティ・空間とはなにかを探るべく現在も調査を続けている。調査結果の一部について、日本社会心理学会、日本グループダイナミクス学会、日本質的心理学会でそれぞれ報告を行った。(2)については、沖縄イメージの認知表象を明らかにするため調査を行った。2010年8月から9月にかけて、海人（沖縄生まれ沖縄育ち）、沖縄移住者、観光客（ヘビーリピーター）、観光客（初訪者）にデジタルカメラを渡し、それぞれの目線から気になるもの、沖縄らしいと感じる物について撮影を行ってもらった。その後、撮影された写真について簡単な面接を行った。2011年2月には冬期の沖縄で同様の調査を行う予定である。これらの調査を通して、認知表象としての沖縄の景観と観光動機との関係を明らかにしていく。また、次年度中に関連学会で調査報告を行う予定である。(3)については、安曇野市周辺の各地域のイメージと居住希望の程度の観点から計量的分析を行っている。分析の結果について、次年度中に関連学会で報告を行う予定である。

金子直樹—旅行ガイドブックを資料として、そこに描かれる観光地の特徴および変容というテーマを設定し、2010年度は以下の作業を行った。(1) まず、研究の基礎となるガイドブック、主に昭和初期から現在まで継続的に発行し続けているJTB（旧ジャパン・ツーリスト・ビューローあるいは日本交通公社）のものを中心にして、その収集および確認作業を行った。(2) その上で、これらが各時期でどのようなシリーズやどの観光地をフォローしているか、あるいはその内容・装丁・書式などの特徴を確認した。その結果、初期においては欧米のガイドブックのような詳細な地誌の内容を中心にしたものが、1970年代頃から観光地の実用的な情報を充実させたものに変化し、その背景として同時期における観光自体の変容（特にディスカバー・ジャパン・キャンペーン）との関

連を考察した。こうした作業をふまえ、(3) 長野県安曇野市周辺および兵庫県神戸市周辺を対象にして、戦前から現代までガイドブックを対象にして、それら観光地の特徴について第二次大戦前から現代まで通史的に確認した。前者では、戦前は北アルプス登山口に位置する温泉のみが登場する程度であったものが、高度経済成長期になると名産品であるワサビやそれを栽培するワサビ田や地元芸術家の作品を展示した美術館などが紹介されるようになり、長野県内の観光地の一つとして取り上げられるようになった。さらに1970年後半からは同地に多く存在する「道祖神」が、1990年代からは同時期から増加した様々な美術館および関連施設も紹介されるようになり、同地を中心したガイドブック（「安曇野」という名称を使用）も多数登場するようになった。一方後者では、戦前は江戸期以来の宗教施設を中心とした名所旧跡とともに、港周辺の施設や神戸周辺で戦死した楠木正成を祭神とした湊川神社などが取り上げられているが、1970年代後半からそれらに加え、かつて外国人らが暮らし、おもに山の手によく残されていた「異人館」が登場し、80年代以降はそれらへの記述が増加して、神戸観光の中心的存在となった点を確認できた。今後は、ガイドブック収集作業を継続しつつ、(3) で確認した各観光地に影響した社会的背景や出来事等を確認し、それらとガイドブックとの対応関係を検証していく予定である。

長尾隼—日本の国立公園制度を事例として、戦前期の風景をめぐる思想と実践を辿ることを研究の目的とした。本年度は以下の2点を実証的に明らかにし、修士論文としてまとめている。

(1) 国立公園選定の際に行われた議論の再構成。国立公園制度をはじめとする風景の制度には、国土空間内からその制度に相応しい事象を切り取ってゆく過程が存在する。こうした実践は、特定の社会的、文化的、経済的な諸力の枠組み内において、偶有性を伴いつつ生じている。しかし、切り取られた空間には、「国立公園」＝「我が国を代表するに足りる自然の大風景地」という表象があまねく節合されてゆく。指定された風景地と国立公園という表象の関係は、指定が行われるまさにその時点で、必然的かつ本質的な結びつきを装うのである。こうした風景地とその表象との関係が創られてゆく議論の場を、さまざまな史料を収集することで再構成し明らかにした。

(2) 特定の国立公園成立過程にみる風景をめぐるポリティクス。大山国立公園の成立過程に注目し、ローカルな社会が国立公園の成立という出来事にどう対応し、中央とどのような関係を取り結んでいたのかを検討した。国立公園が指定されることによって、公園区域に含まれる風景地とそうでない風景地という差異が生じることとなる。後者の風景地に関しては、「国立公園に準ずる風景地」を「府県立公園」という制度を創りだすことによって回収するという構想が国立公園関係者によって練られており、実際に島根県で実行に移されていた。国内の風景地をランク付けし、それぞれをスケールの違えた自然公園として指定してゆく実践は現行の自然公園法によって明文化されているが、本研究でその系譜の端緒が明らかになることとなった。

中野康人—2010年度は、安曇野市で実施した景観に関する計量的意識調査のデータ分析を主な作業として行った。調査自体は2009年度(2010年3月)に実施したものであったが、データ入力、データの整形・クリーニング、単純集計にもとづく記述的な分析などに4月以降に逐次取り組んだ。この調査は、安曇野市民の景観に対する意識や行動とともに、過去の地域移動の経歴や思い出をたず

ねている。その分析の途中経過は「景観の評価と構成要素—安曇野景観意識調査」（中野康人・岡本卓也・渡邊勉，2010，『関西学院大学先端社会研究所紀要』，4: 21-33.）に発表した。有効回収数は580票（標本数1080、回収率53.7%）である。回答者は、母集団の人口構成と比較すると年齢が高めの層が若干多い。西宮市の調査データと比較して、安曇野市民の景観に対する評価は極めて高い。特に、山を始めとする自然環境が重要な要素となっており、自然景観への憧憬は現時点での評価だけでなく思い出の風景にもあらわれている。年度内には、移動経験の影響等のより詳細な分析をすすめ、再度現地をおとずれて現地の行政・市民に調査結果のフィードバックを行う予定である。この他には、ネパールの古都キルティプールの景観に関する予備調査を始めており、次年度以降の本調査へと発展させていく計画である。

Futselaar, Ralf（フツェラル、ラルフ）—Landscapes of Human Health: Introducing Space as an Analytical Tool in Japanese Historical Epidemiology:

The good health of the Japanese has an almost mythical status both inside academic medicine and in popular culture, especially in, North America and Europe. What is not widely known, however, is that the health of the Japanese is a relatively recent phenomenon. From the 1870s, when reliable records begin, to about 1950, public health in Japan lagged far behind similarly developed nations. Around the middle of the Twentieth century, however, Japan changed from a country where health was relatively low, compared to economic development, to one where health was exceptionally high, when compared to economic development but also absolutely. In terms of longevity, disease load and several other indicators, the Japanese are today the healthiest people in human history.

Several attempts have been made to explain the spectacular but as yet mysterious change of Japanese public health in the Twentieth Century. Given the nigh incredible changes that occurred in Japanese modern history and the incredible complexity of public health, it is unsurprising that these attempts have thus far yielded only limited results. Although much has been discovered, the historical epidemiology of Japan remains, by and large, an enigma.

My research in the IASR landscape and space project tries to address these problems by developing a new research methodology. Rather than imagining the changing health of Japanese people in the turbulent middle decades of the twentieth century as a more or less linear development in time, I aim to gather data on health specific to localities and regions, thus arriving at what could be called a landscape of health. Such landscapes may center on a disease, such as tuberculosis, or for example height or longevity, but in any case provide a new perspective on the development Of health in Japan.

Thus far, this project has resulted in one published article, namely: Ralf Futselaar, "A Healthy Defeat? Mapping the Postwar Decline of Tuberculosis in Japan, 1945-1955." In *Virus: Beiträge zur Sozialgeschichte der Medizin* 4 no.1 (2010). On 20 February 2011, newer results will be presented at the University of Berkeley (USA): Ralf Futselaar, "Closing the Gap: Epigenetic Heredity and the Slow Catching Up of Japanese Heights in the 20th Century." (Asia Pacific Economic History Conference, Berkeley, February 2011).

山口覚一ももとの研究テーマである労働力移動や系図学的実践などの研究と平行して、「景観」関連の以下の3つのテーマについて情報収集をおこなってきた。(1) 大阪大都市圏における景観行政の歴史地理的展開、(2) 尼崎市の景観行政をめぐるポリティクス、(3) タワーマンションの歴史地理的展開。この3つは相互に結びついている。

(1) については、現時点では景観行政の動向を歴史的・広域的にとらえる研究が少ないため、大阪大都市圏、特に大阪市および同市に隣接する大阪府下の10市（堺、松原、八尾、東大阪、大東、門真、守口、摂津、吹田、豊中各市）および神戸市、阪神間都市（尼崎、西宮、宝塚、伊丹各市）における1970年以降の景観行政を比較検討するというテーマを立てた。これまでに大阪市に隣接する10市を訪問し、担当部署や図書館などで資料収集をおこなった。なお、松原市については、情報収集に際して同市の事業評価委員を引き受けることになるといったハプニングも経験した。

(2) は(1)のテーマから特に尼崎市の景観行政を独立させて詳細に取り上げるものである。特に同市では1984年に制定された「尼崎市都市美形成条例」に関する諸事象を中心に情報収集をおこなってきた。たとえば担当課である尼崎市都市整備局開発指導課、あるいは「美しく寺町を守る会」の会長などに対する聞き取り調査を実施した。このテーマに関しては先端社会研究所エクスカッションの記録である本号収録の別稿「工都尼崎市を見せる」でも触れた。詳細な内容についてはいずれかの学会で近々報告する予定である。

(3) については不動産業者などのホームページや現地調査によってタワー（超高層）マンションに関する情報を収集し、データを整理しているところである。単に景観問題としてのみ扱うのではなく、都市空間の構造変化や他者との関係などに着目しつつ、幅広く考察していく予定である。このテーマのうち、特に基礎的な情報については近日中に小論としてまとめたい。

雪村まゆみ—今年度は、戦時期における支配の領域の拡大によっておしすすめられる空間の再編成がいかにして表象されたのか、アニメーションを事例に考察した。そして、空間の再編成を引き起こす他者との接触を契機として、新たな文化が制度化されることを明らかにした。その成果の一部については、第83回日本社会学会（於名古屋大学）にて、「空間の再編成と文化の制度化—戦争とアニメーションの関連から」というタイトルで報告を行った。また、2010年10月26日から11月1日の日程で、ブリュッセル旧市街地において、19世紀後半の都市美運動が、現在の都市空間をいかにして形成しているのか、たとえば、歴史的建造物の保存と、近代的な都市開発との両立がいかにして、今日の景観を形成しているのか、現地調査を行った。現在、旧市街に関しては、私有の建物の一部に対して行政からの資金援助もあり、建物の表部分は伝統的様式に統一するように保存されている。一方で、ブリュッセル中央駅周辺は駅舎を含めて近代的な建築様式である。歴史を顧みない開発が「ブリュッセル化」とも言われているが、一方でベルギーは新しい物を受容する素地があり、それが景観や文化に表象されている点が非常に興味深い。その文化の一つとして、ベルギーには1970年頃に最盛期を迎えたマンガ文化がある。マンガ博物館で展示されているマンガの主流なテーマは、アジア、アフリカ、南米、宇宙といった異空間への冒険物語であった。この調査を通じて、ベルギーにおける空間認識とマンガ文化の誕生の関連について考察することによって、現代社会における文化の制度化のプロセスが明らかになるのではないかと考えた。

渡邊勉—安曇野市において、2005年から2009年まで毎年、景観や地域コミュニティをテーマにした調査をおこなってきた。当初は、地域、観光、地域ブランドといった観点から安曇野景観の価値、景観と地域コミュニティの関係などをテーマとしてきた。しかし2008年度からは、景観そのものに焦点をあてて、2008年調査において、具体的に住民に美しい景観の写真を撮ってもらう調査をおこない、2009年には景観を構成する要素を具体的に尋ねるなど、そもそも住民にとって景観とは何か、景観は何によって構成されるかをテーマとして研究を進めてきた。これまで各年度個別に分析をしてきたが、本年度からはこれら過去5年間にわたって継続的におこなってきた調査データに関する総合的な分析を試みている。特に地域住民にとって景観の意味、住民生活に対して景観が果たす役割などを具体的なテーマとしている。まだ実質的な成果は出ていないが、さらに景観あるいは空間を、社会学的に分析することの意義や可能性、構造化された調査票による調査および定量的な方法によって、景観の地域社会に与える影響、住民にとっての意味などをどのように探ればいいのかなど、景観問題を通じて空間に関する社会学的分析の可能性、方法論の革新についての検討も進めている。

◆「セキュリティ／排除」プロジェクト

リーダー：難波功士研究員（関西学院大学社会学部教授）

「セキュリティ／排除」プロジェクトでは、「境界線上の空間と経験」をテーマに掲げている。安全・安心(security)を確保するために、ある線引きがなされ、何らかの人・モノ・コトが排除(exclusion)され、「ウチ／ソト」が形成されていくことは、さまざまな社会において、かつその多様な位相において確認しうる事象であろう。しかし、その線引きは固定的なものではなく、そこに関与する人々のその時々インタラクションを通じて変動・消失・生成を繰り返していき、また当事者の視点次第によって「ウチ／ソト」の区分は揺らぎ、時に反転していく。本プロジェクトは、境界線に設けられた物理的な塀やフェンス、もしくは行政区分や国境などを問い直すだけでなく、「線上の空間」としか呼びようのない場での多種多様な人々のインタラクションを検証し、そこでのさまざまな生きられた経験を検討していく試みなのである。そして、「ウチ／ソト」の成員を固定化させていく力と、流動化させていく力との相克のダイナミクスを描き出すことを目標とする。

この場合の空間とは、歴史的に形成されてきた景観や場所の記憶と分かち難く結びついた空間であり、そこに関わる者たちそれぞれが異なる意味づけを与えているかもしれない空間であり、さらにはメディア上の、もしくはメディアを介したインタラクションが含み込まれた空間であったりもする。

本プロジェクトでは、このようにさまざまにありうる「境界線上の空間と経験」について、とりあえず「ローカル」「グローバル」「ヴァーチャル」の三つの視角に大別しつつ、研究を進めようとしている。これは非常に便宜的な分類であって、もちろんグローバルな人やモノの移動によってもたらされる経験は、ローカルな場において実践されるものであろうし、ヴァーチャルな空間が、ローカルにもグローバルにもなりうることは多言を要しまい。公募研究として採択された“The battle against ‘Virtual exclusion’: Civil society media activism around Internet and media policy”も、ヴァーチャルな位相での排除の問題を扱うものであるが、決してそこに閉ざされた議論を旨とするものではない。

2010年7月26日には第1回研究会（2010年度先端研定期研究会第3回）を行い、報告「メディア空間論から見た『セキュリティ／排除』関係へのアプローチ」（先端社会研究所専任研究員・岩佐将志氏）にもとづき質疑応答がなされた。そこでは、「戦争が生み出す社会」研究プロジェクトの在日米軍基地研究の成果を引き継ぎつつ、基地や沖縄がメディアを通じていかに表象され、メディアによって何が語られ、何が語られていないかが議論された。そして、「包摂されざるものすべてが短絡的に不安要因とみなされ、排除の対象となりかねない現在」について考察を深めるという本研究プロジェクトの目的が再確認された。

次いで、2010年12月3日に第2回研究会（2010年度先端研定期研究会第7回）を開き、“From security threat to security responsibility : Postwar reparations and care for Danish resistance veterans”（先端社会研究所専任研究員ラルフ・フツェラル氏）の報告と、それに対する石井香江氏（四天王寺大学）による「ドイツ史からのコメント」が行われた。報告・コメントを通じて、第二次世界大戦後のヨーロッパにおける、いわゆる PTSD（post-traumatic stress disorder、心的外傷後ストレス障害）の語られ方、その社会的位置づけの変化、さらには医学や社会福祉学の領域から社会科学全般へと議論が広がる歴史的過程が確認された。その上で、今日日本でも一般的に「トラウマ」という語が用いられるようになったことの意義、心的外傷を負った人々の社会的な包摂と排除などをめぐって議論がなされた。

2011年2月18日には第3回研究会を開き、報告者に前田至剛氏（皇學館大學）を予定している。前年中の研究会が、どちらかといえば「グローバル」な問題を扱ったのに対し、3回目では「ヴァーチャル」な世界におけるセキュリティ／排除を扱うことになる。可能ならば年度内にもう一度研究会を開き「ローカル」な位相での問題を議論しておきたいと考えている。

今年度は、プロジェクト・メンバーの個人的な研究活動が中心となったが、プロジェクト最終年度となる2011年度には各個人研究の深化とともに、全体のまとめ作業にもとりかかりたい。そのために、必要に応じて適宜ゲスト・スピーカーを招きながら研究会活動を続けるとともに、ここ2年間「リスクと排除の社会学」「反リスク・反排除の社会運動」をテーマに例会を開催してきている関東社会学会との交流もはかっていきたい。